

第2節

補血剤

補血剤は、血を補うことにより血虚証を治療する方剤である。主に補血養血薬によって組成される。血虚証では、眩暈・顔色が蒼白く艶がない・口唇の色が薄い・爪がもろい・動悸(心悸)・不眠(失眠)・健忘・便秘・月経不順・経血の量が少なく色が薄い・舌質淡・脈細などの症状を呈する。

主な構成生薬は、熟地黄・当帰・白芍・阿膠・枸杞子・竜眼肉などの補血薬である。血虚証では気も損傷されやすく、血が不足すると血のめぐりが滞り瘀血が生じやすい。そのために、補血剤にはよく補気薬や活血薬が配合される。代表的な方剤に、四物湯・当帰補血湯・帰脾湯がある。

<補血剤>

適応症	血虚証：眩暈・顔色が蒼白く艶がない・口唇の色が薄い・爪がもろい・心悸・失眠・健忘・便秘・月経不順・経血の量が少なく色が薄い・舌質淡・脈細
構成生薬	補血薬：熟地黄・当帰・白芍・阿膠・枸杞子・竜眼肉など
代表方剤	四物湯・当帰補血湯・帰脾湯

四物湯

しもつとう

【出典】『太平惠民和剂局方』『仙授理傷統断秘方』

【組成】当帰9g，川芎9g，白芍9g，熟地黄9g

【用法】水で煎じて服用する。

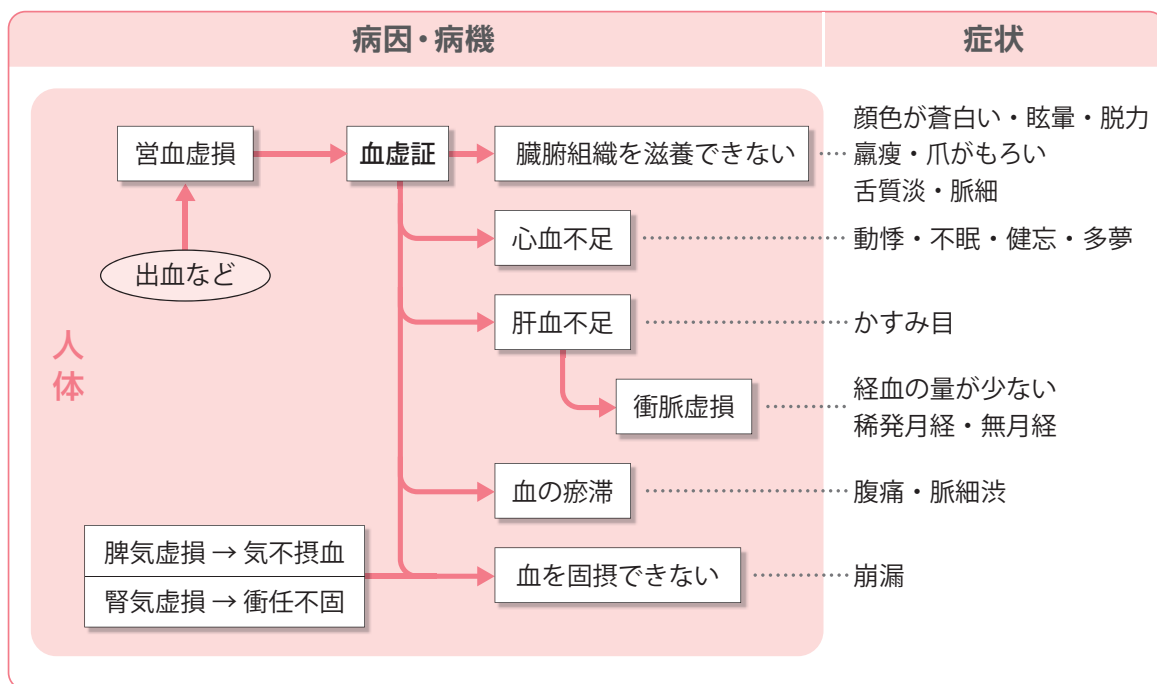
【効能】補血調血(補血和營)

【主治】営血虚滞証

顔色が蒼白く艶がない・眩暈・かすみ目・動悸(心悸)・不眠(失眠)・健忘・脱力(体に力が入らない)・羸瘦・爪がもろい・月経不順・経血の量が少なく色が薄い・無月経・崩漏・腹痛(臍周囲の疼痛)・舌質淡・脈細弦あるいは細洪。

【病機と治法】

出血などさまざまな原因によって営血が損傷され、血の不足に伴い血の瘀滞が生じた病態が、



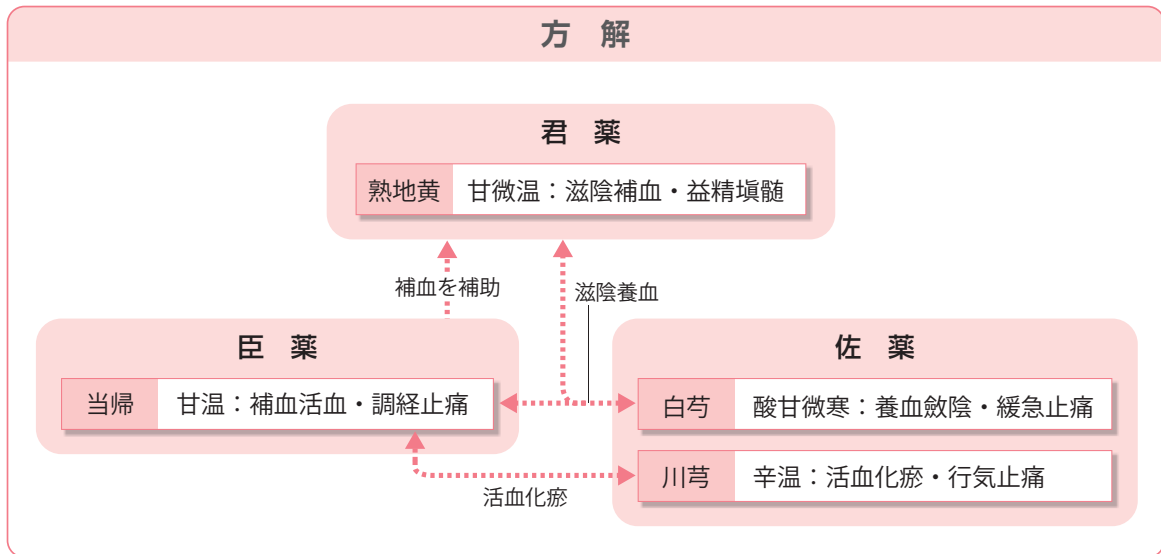
本方剤の適応である。営血が虧損されると臓腑組織を十分に滋養できなくなるために、顔色が蒼白い・眩暈・かすみ目・脱力・羸瘦・爪がもろいなどの症状を呈する。動悸・不眠・健忘・夢が多いなどは、心血を滋養できないための症状である。衝脈は血海であり、任脈は胞胎を主る。肝血が不足して衝脈が虚損され血海が空虚となれば、経血の量が減って色が薄くなり、月経が遅れるなどの症状が現れる。営血不足により脈道が渋滞すれば、少腹部に痛みが生じ脈が細澁となる。もし脾気が虚損されて摂血の力が低下したり、腎気が虚損されて衝任不固となれば、崩漏を呈する。舌質淡・脈細は、営血が不足するための症候である。治療は、失われた営血を補充して臓腑組織を滋養するとともに、伴う血の瘀滞を取り除く。

【方解】

甘微温の熟地黄は、肝経と腎経に入って滋陰補血・益精填髓する君薬である。甘温質潤の当帰は、肝血を滋補するとともに活血調経し、熟地黄の補血の機能を補助して行血導滞する臣薬である。酸甘微寒の白芍は、養血斂陰の効能により熟地黄や当帰と組んで滋陰養血するとともに、緩急止痛の効能により腹痛を治す。辛温の川芎は、血分に入って活血行気し、当帰と組んで血脈を暢達させる。これらはともに佐薬である。これらの配合により本方剤は、失われた営血を補うとともに活血行滞し、血虚に血の瘀滞を伴う病証を治療する。本方剤は、わずかに四味で組成されながら、血を補うものの滞らせず、血をめぐらすものの破血しない合理的な配合となっており、治血の基本方剤としてさまざまな血証に応用される。

【加減】気虚を伴う場合は、人参・黄耆・白朮を加えて補気生血する。血の瘀滞が著しい場合は、白芍を赤芍に代え、桃仁・紅花・丹参を加えて活血祛瘀の力を強化する。血寒を伴い月経痛を呈する場合は、肉桂・炮姜・呉茱萸を加えて血脈を温通させる。血虚に鬱熱を伴う場合は、熟地黄を生地黄に代え、黄芩・牡丹皮を加えて清熱涼血する。妊婦で胎漏を呈する場合は、阿膠や艾葉を加えて止血安胎する。

【応用】貧血・不整脈・不眠症・月経不順・無月経・蕁麻疹などの疾患が営血虚滞証に属する



場合に、本方剤が応用される。

【注意】湿盛証や軟便を呈する者には、用いてはならない。

【参考】本方剤は、『金匱要略』婦人妊娠篇の芎帰膠艾湯から阿膠・艾葉・甘草を除いた構成となっている。補血調経（補血調血）の基本方剤として、薬味を加減してさまざまな血虚証に応用される。

附方

四物湯に関連する方剤

聖癒湯 せいゆとう

【出典】『医宗金鑑』

【組成】四物湯に人参と黄耆を加える。

熟地黄 20 g, 白芍 15 g, 川芎 8 g, 人参 15 g, 当帰 15 g, 黄耆 18 g

【用法】水で煎じて服用する。

【効能】益気・補血・摂血

【主治】気血両虚証兼気不摂血証

崩漏・頻発月経（月経先期）・経血の量が多く色が薄い・四肢に力が入らない・全身倦怠感・元気がない。

【病機と方解】

気血がともに虚損されて血を統摂できなくなり、崩漏などの出血症状を呈する病態が、本方剤の適応である。

補血調血の効能をもつ四物湯に人参と黄耆が加わり、気血を双補しながら益気摂血する。

桃紅四物湯 とうこうしもつとう

【出典】『医宗金鑑』『玉機微義』

【組成】四物湯に桃仁と紅花を加える。

熟地黄 9 g, 川芎 9 g, 白芍 9 g, 当帰 9 g, 桃仁 9 g, 紅花 6 g

【用法】水で煎じて服用する。

【効能】養血活血（逐瘀）

【主治】血虚血瘀証

頻発月経（経期超前）・経血の量が多く塊が混じる・経血が暗紫色で粘稠・腹痛・腹部の脹満感。

【病機と方解】

営血の虚損に血の瘀滞を伴う血虚血瘀証が、本方剤の適応である。

養血活血の効能をもつ四物湯に桃仁と紅花が加わることで、四物湯よりもさらに活血化瘀の効能が強められている。

【注意】攻破の力が比較的強力な破血逐瘀剤であるから、効果が得られたら投与を中止し、過量に服用しないように注意する必要がある。もし過量に用いれば、血崩や過多月経を引き起こすおそれがある。

四物湯に関連する方剤

方剤名	四物湯への加減	主治
聖癒湯	人参と黄耆を加える	気血両虚証兼気不摂血証：崩漏・頻発月経・過多月経・四肢の脱力・全身倦怠感
桃紅四物湯	桃仁と紅花を加える	血虚血瘀証：頻発月経・過多月経・腹痛・腹部の脹満感

当帰補血湯 とうきほけつとう

【出典】『内外傷弁惑論』

【組成】黄耆 30 g, 当帰 6 g

【用法】水で煎じて服用する。

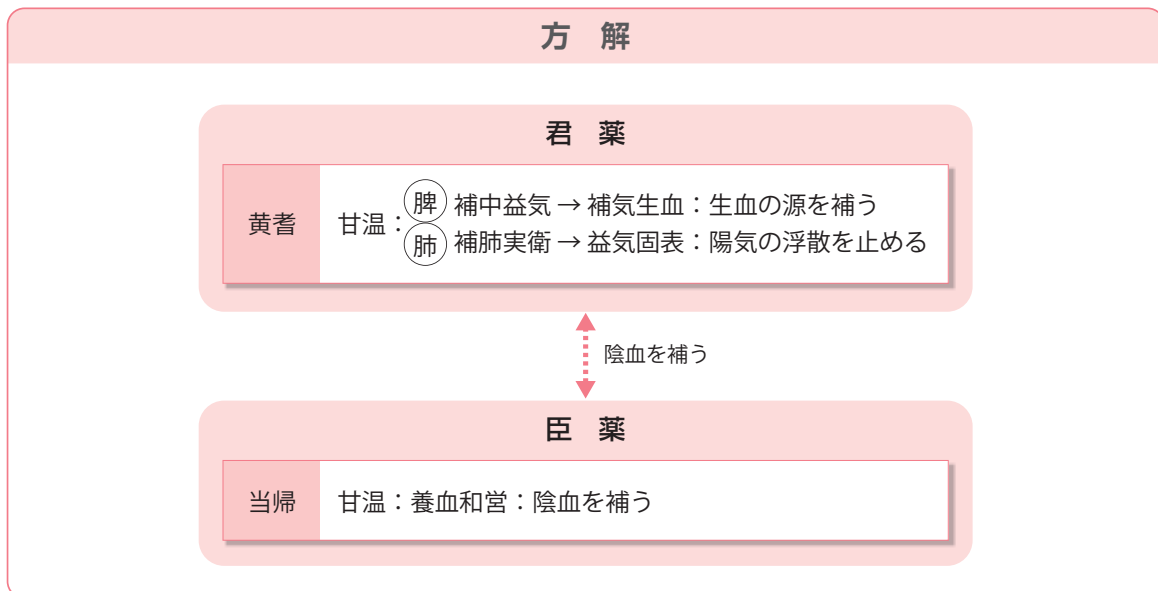
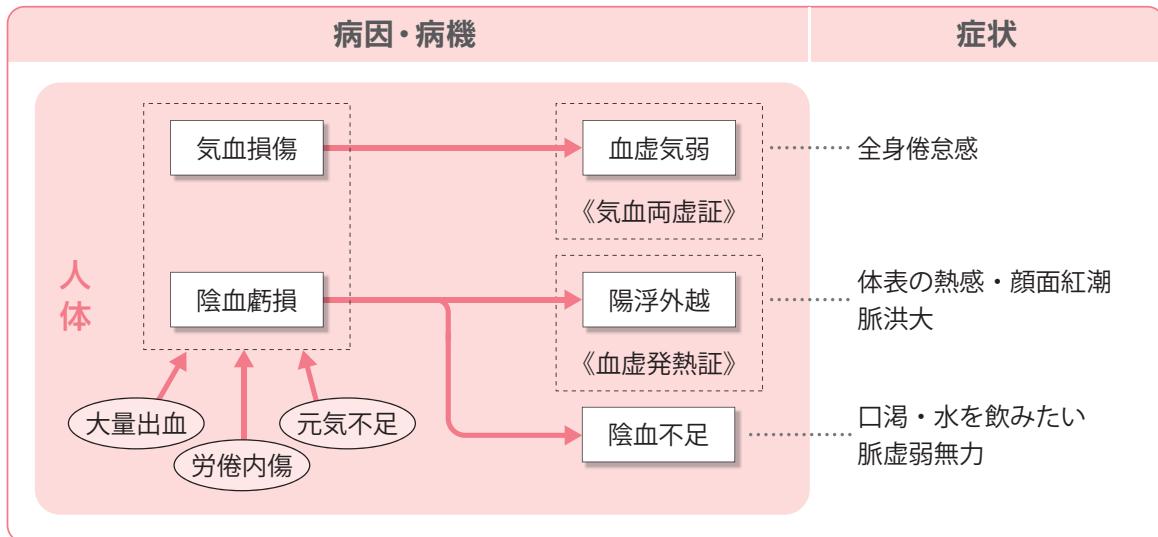
【効能】補気生血

【主治】気血両虚証（気弱血虚）・血虚発熱証（陽浮外越）

全身倦怠感・体表の熱感・顔面紅潮・口渇・水を飲みたい（煩渴欲飲）・舌質淡・脈洪大かつ虚弱無力、あるいは月経期や出産後の血虚による発熱や頭痛、治癒し難い皮膚潰瘍（瘡瘍）。

【病機と治法】

陰血（営血）が虚損されたために発熱する血虚発熱証が、本方剤の適応である。現在では、気血両虚の病証に広く用いられる。血は気の母であり陽気を乗せて全身をめぐっている。大量の



出血や労倦による内傷・元気の不足などによって陰血が虧損されると、陽気が拠り所を失って浮き上がり外越して発熱する。浮き上がった陽気が体表へ外越するために、体表の熱感や顔面紅潮・脈洪大などの症状を呈し、陰血が不足するために、口渇や水を飲みたい・脈虚弱無力などの症状を呈する。本証の病態の基礎は陰血の虧損であるから、治療は補気生血することで失われた陰血を補充する。

【方解】

大量に配合される黄耆は、肺と脾の気を大いに補い、気を補うことで生血の源を充足させ、益気固表することで陽気の浮散を止める君薬である。「有形の血は自ら生じることはなく、無形の気によって生じる」という理論がある。当帰は、養血和營の効能により病態の本である陰血の不足を補う臣薬である。これらの配合により本方剤は、補気生血の効能を発揮して陰血の虚損を補うとともに、血虚に伴う陽浮外越の発熱を治療する。一方、本方剤は補気養血の効能が生肌収口を促進することから、治療し難い皮膚潰瘍にも用いられる。

【加減】血虚津虧が著しく、口渴や舌燥を呈する場合は、人参・麦門冬・生地黄を加えて益気生津する。陽浮が著しく、体表の熱感や脈数を呈する場合は、白薇・桑葉・銀柴胡を加えて清退虚熱する。気不摂血による出血を呈する場合は、仙鶴草や血余炭を加えて止血する。陽浮による発熱を伴わない場合は、黄耆の用量を減らして熟地黄や白芍を加える。

【応用】貧血・アレルギー性紫斑病・治癒し難い皮膚潰瘍・過多月経・月経期や出産後の発熱などの疾患が気血両虚証に属する場合に、本方剤が応用される。

【注意】陰虚内熱証には用いてはならない。

比較

白虎湯と当帰補血湯

本方剤の適応証は、発熱・顔面紅潮・口渴・水を飲みたい・心煩・脈洪大などの症状が白虎湯証の症状と似ているため、注意が必要である。白虎湯証では、脈が洪大であるとともに実満であり、口渴が強く冷たい水を飲みたい・高熱・大汗など、いわゆる「四大症」を呈するのに対して、当帰補血湯証では、脈は洪大であっても虚軟であり、口渴に伴い温かいものを欲し、発熱するものの高熱ではなく、大汗もみられない。とりわけ発熱に関しては、陽明熱盛によるものと血虚に伴う陽浮外越によるものを明確に区別する必要がある。もし誤って当帰補血湯証に白虎湯を用いれば、「虚を虚す」ことになり、白虎湯証に当帰補血湯を用いれば、「実を実する」ことになる。いずれも効果がないばかりか病態を悪化させることになりかねない。

帰脾湯

きひとう

【出典】『済生方』『正体類要』

【組成】白朮9g、茯苓9g、黄耆9g、竜眼肉9g、酸棗仁9g、人参9g、木香5g、炙甘草3g、当帰9g、(炙)遠志9g

【用法】生姜3gと大棗6gを加えて水で煎じて服用する。あるいは粉末にしたものを蜜丸にして服用してもよい。

【効能】益気補血・健脾養心

【主治】

①心脾気血両虚証

動悸(心悸怔忡)・健忘・不眠(失眠)・発熱(虚熱)・盗汗・食欲不振(食少)・全身倦怠感(体倦)・顔色が黄色く艶がない(面色萎黄)・舌質淡・舌苔薄白・脈細弱。

②脾不統血証

血便・皮下出血・不正子宮出血・崩漏・頻発月経(月経超前)・経血の量が多く色が薄い(色淡)・過長月経(淋漓不止)・白色帯下・舌質淡・脈細弱。

【病機と治法】

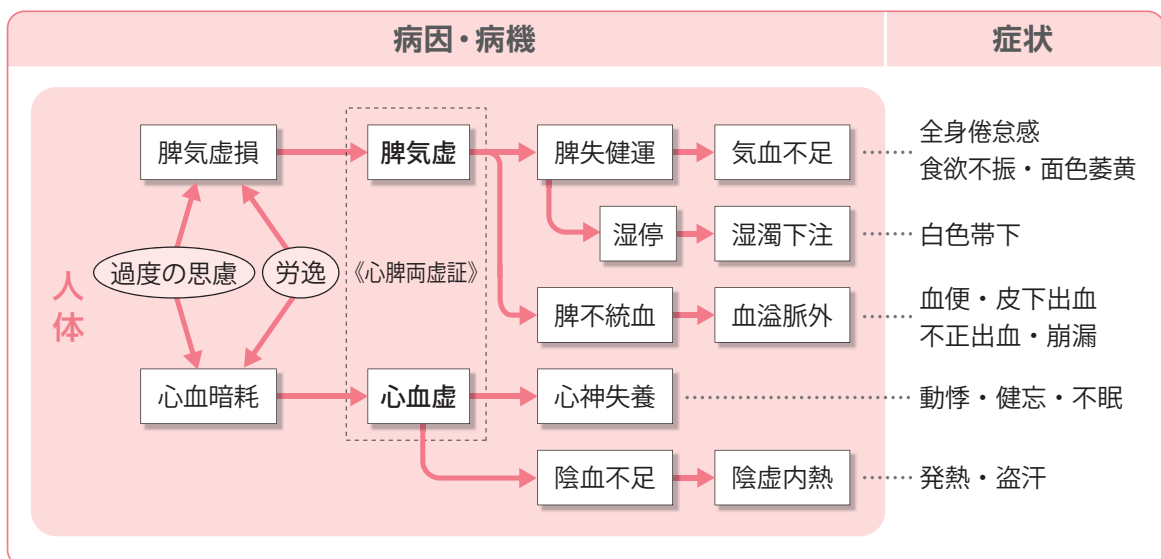
過度の思慮や労逸によって心血と脾気がともに虚損された心脾両虚証が、本方剤の適応である。心は神を蔵して血を主り、脾は思を主り血を統摂する。よって過度の思慮や労逸は、心脾の気血を損傷する。脾気が虚損されて脾の運化の機能が失調すると、気血の生化が低下するために全身倦怠感や食欲不振・顔色が黄色く艶がないなどの症状を呈し、脾の統血の力が低下すると、血が脈外に溢れて血便・皮下出血・不正子宮出血・崩漏などの症状を呈する。心血が滋養されずかつ暗耗されると、心神が栄養を失うために動悸や健忘・不眠などの症状を呈する。陰血が虚損されて内熱が生じれば、発熱・盗汗などの症状が現れる。白色の帯下は、脾虚により湿の運化が低下し湿濁が下注したための症状であり、舌質淡・脈細弱などは、気血が不足するための症候である。治療は、益気健脾することで脾の運化と統血の機能を回復させるとともに、心血を補って養心安神する。

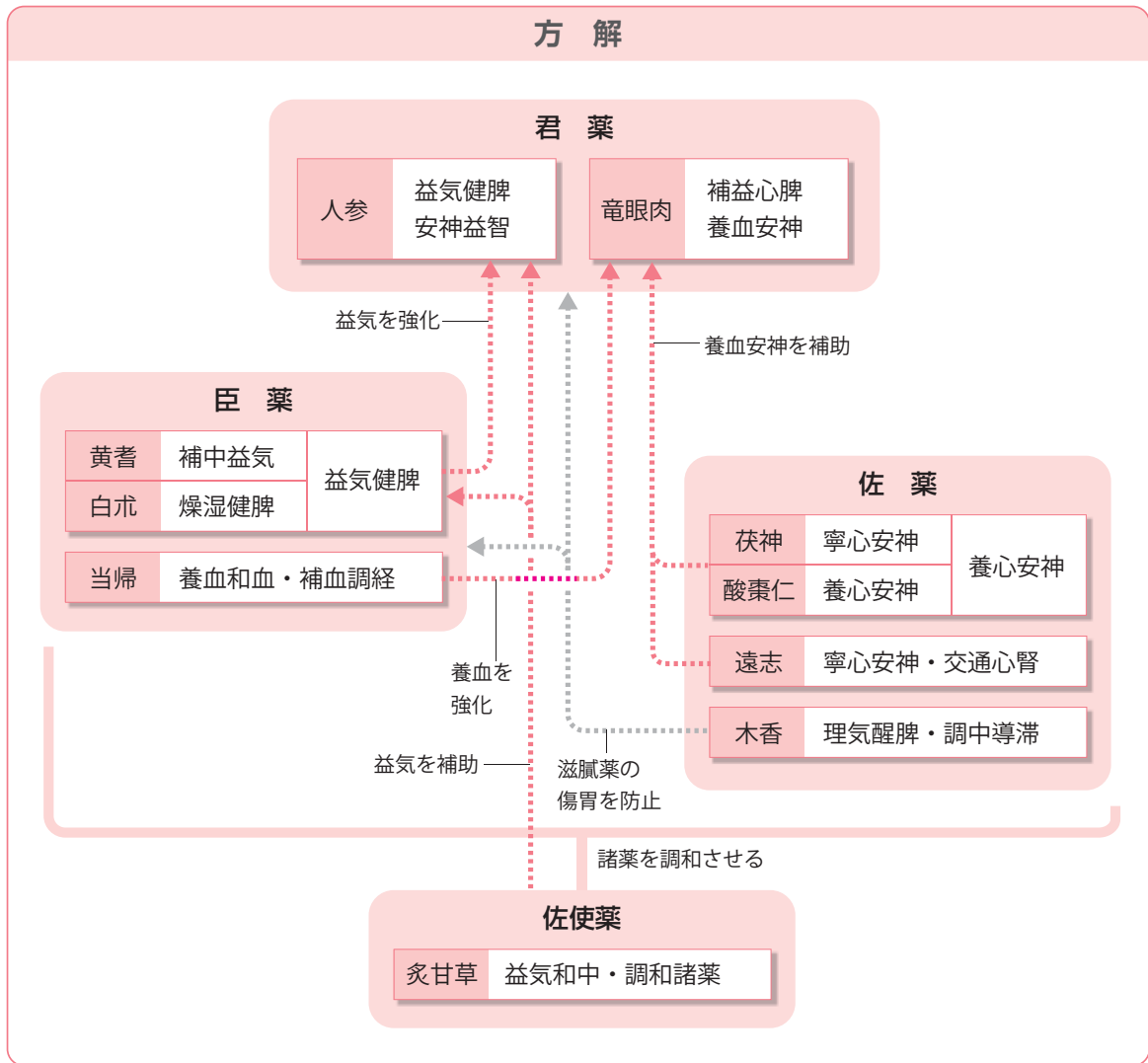
【方解】

甘微温の人参は、益気健脾することで生血して養心安神し、甘温の竜眼肉は、心経と脾経に入って心脾を補益し養血安神する。これらはともに君薬である。黄耆と白朮は、益気健脾の効能により人参を補助して脾気を補い、甘温の当帰は、養血和血の効能により竜眼肉の養血安神の効能を強化する。これらはともに臣薬である。茯神と酸棗仁は養心安神し、遠志は寧心安神するとともに心腎を交通させる。木香は、理気醒脾の効能により、他の益気補血薬の滋膩の性質による脾胃の障害を防止する。これらはともに佐薬である。炙甘草は、益気和中するとともに諸薬を調和させる佐使薬である。煎じる際に加わる生姜と大棗は、脾胃を調和して気血の化生を強化する。これらの配合により本方剤は、失われた脾気を補うとともに心血を滋養して、脾気と心血がともに虚損された心脾気血両虚証を治療する。

【加減】血虚が著しい場合は、熟地黄や阿膠を加えて補血の力を強化する。崩漏や血便に少腹部の冷痛や手足の冷えを伴う場合は、艾葉炭や炮姜炭を加えて温経止血する。口や舌の乾燥・虚熱・盗汗など陰虚内熱の症状を呈する場合は、生地黄や阿膠・牡丹皮を加えて滋陰清熱する。

【応用】狭心症・貧血・胃十二指腸潰瘍・機能性子宮出血・血小板減少性紫斑病などの疾患が、心脾気血両虚証あるいは脾不統血証に属する場合に、本方剤が応用される。





【注意】 陰虚血熱による出血には、使用を控えるか慎重に投与する。

【参考】 本方剤は、心と脾をともに治療する方剤であるが、脾を補う点に重点が置かれている。また、気と血をともに補う方剤であるが、気を補う点に重点が置かれている。